

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 24 日現在

機関番号：13701

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2011～2013

課題番号：23652060

研究課題名(和文)ダックとコリアの比較研究に始まる「性」と「経済」から見た「水」表象の研究

研究課題名(英文)Water, Economy, and Gender/Sexuality in Poems of Duck and Collier

研究代表者

中川 一雄(Nakagawa, Kazuo)

岐阜大学・地域科学部・教授

研究者番号：10155674

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,600,000円、(間接経費) 780,000円

研究成果の概要(和文)：メアリ・コリアの文化的想像力と詩的言説は二重の意味で疎外されている。経済的・社会的構造において彼女は、スティーブン・ダックと同様に、下層の労働者階級に属している。彼らは領主層に「服従」し、その命に応じて労働することによって賃金を得、最底辺の貧困生活を送る。もうひとつのレベルでは、女性であることによって男性に抑圧されているのである。この抑圧構造がダックの農婦批判という言説を生んだと言える。この経済と性に関わる二重の疎外性は、当時のジェントリー階級文化のイデオログの一人であったアレグザンダー・ポウプの詩を二人の詩と対置させ、彼ら3人の詩における水表象の分析によって明らかとなる。

研究成果の概要(英文)：Mary Collier's poetic voice, or her plebeian-cultural imagination as "a washer woman," is found out to be "doubly" alienated; first from her seemingly "opposing" male, Stephen Duck as a thresher, who belongs to the same social class as hers, common labouring class, and then from their cultural opponent, Alexander Pope, who clearly belongs to the gentry/squierarchy as a representative of 18th-Century polite culture.

This double alienation of her can be shown through our analyses of their several poems concerning the aspects of rural society at those times; the poems are interpreted culturally and socially by comparison of their particular clusters of "water" imagery, together of their sex/sexuality/gender ideologies, in their poetic discourses.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学、英米・英語圏文学

キーワード：18世紀英文学 農民詩 水表象 フォルマリズム 社会・経済構造 性 - ジェンダー

1. 研究開始当初の背景

(1) 国外では、英国社会の「近代性」への批判や政治的思潮に関連して、ジョンソンやスウィフト、デフォーやポープなどの研究が盛んに行われてきた。最近でも、たとえばL. ブラウンの『近代性の寓話』に伺われるように、個別の作家研究の枠を越え近代社会を文化史的にとらえようとする試みが多い。また、R. ウィリアムズやE. P. トムソンのように、近代の労働者の現実や生活を牧歌・農耕詩の歴史や経済史の枠組みで指摘してきたいわゆるニューレフトの研究があり、今でも意義深い。しかしブラウンの場合もウィリアムズたちの場合も、家父長的で帝國的な支配・抑圧イデオロギーの農村社会での現実的投射を探る視点や「水」表象(フォルム)に現れる原型的想像力を分析する視点、そして「性」的關係性などを複合的に視野に入れることはなかった。

(2) 研究者はこれまで、文化的「水」表象とイングランド近代の重商主義的社会思潮の關係を探り、共同体の「生命の水」と交易の「富の水」が交差する文化史的接点を探ってきた(「ブレイクの『生命の川』」など)。また、帝国主義的・家父長的な「膨張」思想とジェンダー構造との明確な關連性を指摘してきた(「憐憫と現実の間で」など)。国内では海老澤豊氏の労作『田園の詩神』や論集『農耕詩の諸変奏』が、綿密かつ丁寧にイングランド近代の「田園詩」の文化史的意味を解説してきた。研究者もおおいに刺激を受けたが、それゆえなおさら、本研究がめざす農民詩の分析を通じた下層労働者や彼らを取り巻く社会に特徴的な文化的想像力と社会思潮との複合構造的把握の必要性を痛感させられた。

2. 研究の目的

本研究は、ステイーブン・ダックとメアリー・コリアという下層賃金労働者の労働詩と詩中の「水」表象を比較分析対象に据え、長い18世紀とも言われるイングランド近代社会における対照的(抑圧・支配的)な社会意識を複合的に(「性」と「経済」から)交差させることによって、時代の文化的特徴を重層的かつ構造的に浮かび上がらせることをねらう。

3. 研究の方法

本研究は広義のフォルマリズムのアプローチを援用し、文学形式(表象)を社会的・歴史的文脈のなかでその意味を探ろうとする、謂わば、歴史的視点に立つものである。川崎寿彦がかつてマーヴェルの庭形象研究で行った視点と方法に刺激を受けたものでもある。さらに言えば、最近のG. スピヴァックが提唱したように、研究の方法的対象として語り手(詩人)の、とりわけダブル・バインド状態の「声」という詩的言説に、「倫理的・原型的」に耳傾けることにも留意した。

そして本研究では「水」表象(言説)を語る3人の詩人たち(ダック、コリアそしてポープ)の「声」の差異に注目し、その社会性を分析した。

4. 研究成果

(1) ダック(Stephen Duck)の *The Thresher's Labour* (1730 ed.) について

①使用テキストに関して

この1730年出版の初版はダックがオーソリティを与えなかった「海賊版」であり、1736年以降出版された「認可」バージョンでは不規則な詩的形式もずいぶん修正されている。しかし、トムソンも指摘するように、初版=海賊版のほうが、語り手=農業労働者の実際の経験を「農民」言葉で語るものであり(神話的な人物やエピソードを挿入することがより少ない、より「詩的」ではない「田舎風」の言葉が多用された)、詩人の「肉声」により近い言説となっている。また、後述するコリアの反歌は、初版にあっても認可バージョンでは修正削除された記述に対して異議を唱えている。それゆえ初版を分析対象とした。「肉声」が語る内容は、より短い前半(第4連83行まで)とより長い後半に分かれ、前者は脱穀の労働を語り、後者はその他の時期、とりわけ夏の干し草づくりと穀物の収穫時期の労働を歌う。辛い労働で気を和紛らわせるために歌われる、いわゆる労働歌ではなく、全編を通して文字通り「労働(labour)の「労苦(toil)」が繰り返し語られる。

②ダックの葛藤の声

奇妙に矛盾を内在しているのが冒頭のインヴォケーションである。ダックの詩神は「喜びをもって」「絶えることなき労苦」をはたして歌えるのであろうか。この矛盾は社会的な意味を帯びている、と考えたい。インヴォケーションだけはパトロン(オックスフォード大学詩学教授)の勧めに従い、時の王妃キャロライン(ジョージ2世の妻)に農民ではなく詩人として「認められる」ために、また王妃に詩を読み上げるのが詩学教授であったがために、ダックは「肉声」を語る自らのうちに葛藤を抱えた。農民(賃金労働者)と詩人という社会的階層の差異や、差異からくる欲望と感情を、葛藤の場で「いったん棚上げ」した結果の矛盾ではないだろうか。「棚上げ」したことによって、ダックという語る主体が構築され、その「声」が詩として生産されていく、という積極的なダブル・バインド状態をここに見るべきであろう。

③ダックの語る「水」

ダックの声が「湧き出る水音」をこだまさせることはない。彼の目に「喜ばしき事物」が映ることもない。ここでの声の空間は、概ね「長い」18世紀(1688-1815)に廃れていった牧歌でも、またそれにとって替わりつつあった、労働-勤勉を美德と主張するウェルギリウス流の「肯定的」な農耕詩の伝統でもない。下層賃金労働者としての「新しい」だがけっ

して珍奇ではない」感情の構造を物語る声であった。その構造とは、激しい労苦のために「牧歌の声」を出せない「語らぬ」ダックと、彼が耳にし「屈服」する声の持ち主、「ののしり」「バカだ、のろまだ」と怒りを「語る」領主(地主-ジェントリー階級)との関係である。

春になると、恵みの「水-驟雨」が大地を潤し、農地は色とりどりの花で装いを新たにす。だが、すぐに夏が迫り来て、領主の命により「新しい」賃仕事-干し草作りが繰り広げられる。草刈りの「武器」として野に携えていくものは、「砥石」に「(パンを入れた)肩掛け袋とビール」。労働開始当初は「競って」草を刈っていくのだが、やがて労苦に倦み疲れ、高く昇った太陽の熱き日差しも加わって、大鎌使用も頼りなく、ぼたぼたと流れ落ちる汗という「水」が流れる。労働する「力」も使い果たされる。パンとビールで再び労働の「力」を取り戻そうとするも、ひりついたのどにパンが通ることも難しく、恵みの「水」としてのビールはあまりにもわずかで、渴ききったのどを潤すことはない。ダックの肉声が語りうる「水」は、こうして「労苦」の汗の水でしかないことが分かる。

④農婦たちを語る声

長い第9連では、農婦たちが農作業もそこそこに「うるさくおしゃべりする」様子が語られている。次の第10連でも、雨が降れば労働を投げ捨て一目散に生け垣へと雨宿りする女たちの様子が、おなじ光景を繰り広げる雀たちと重ね合わせられる。落ち穂拾いの手を止めてはおしゃべりする農婦たちの姿も語られる。度重ねての農婦批判の声である。(コリアにはこのあたりが痛く腹の虫をつついたようで、反論の声を上げる。)

⑤注目すべき関係

しかし、女たちに向けられたダックの声には、ダックたちを「しっかり働け、怠けるな」と怒り叱る領主と同じ非難と「支配」の響きがあるのではないだろうか。コリアが反論するのも無理からぬことかも知れぬ。農婦も農夫も、社会構造的にはまったく同様の抑圧-支配の下に置かれているのだから。この点では、コリア自身も不満の矛先を向けるべきはダックではなく、地主階級の「ご主人様」や「奥方様」のはずであるのだが。

自らを取り込む社会構造をダックが認識していた点も見逃せない。末尾近くの収穫後に地主が提供する「宴」の場面である。真昼の野では十分に享受できなかったビール(「水」)も食事もたっぷり供された宴であるが、それはほんの一夜の「まやかし」で、翌朝になれば変わらぬ「労苦」が繰り返されることが語られる。「永遠」に循環される労苦がダックたちの労働の本質であることが示され、声は語るのを止める。

(2)コリア (Mary Collier) の *The Woman's Labour* (1939) について

①コリアの「声」質

この『女の労働』には副題(「脱穀農夫の労働という最近の詩に対する回答としてのステイブン・ダック氏への書簡」)がついている。ダックの詩と比べて押韻対句形式はよりたどたどしく、因習的伝統(たとえば詩神への呼びかけ、古典文学へのアリュージョンなど)はより希薄で、使われている語句や文法的配置なども、彼女の言うとおりに(村の学校にすら通ったことがない、読み書きは母親から学んだ)、一般の労働者たちの少しかしこまった使用形態により近いものがある。だからこそ、ダック以上に、彼女の語る声はより素朴で率直な感情を表出していると言えよう。その感情とは最下層の階層を「脱出した」ダックにたいする羨望を滲ませつつ、その「負」の感情ゆえの、ダックの農婦批判に対する心からの反発である。その憤りはなかなか激しく厳しい。こうして、恨みとまっとうな反論という葛藤-ダブル・バインド状態からコリアの声は出される。

②自らの立場を表明する「声」

冒頭で、「不滅の詩人よ！」と呼びかけながら、「貴族たちからお金をもらい、キャロライン [王妃] に取りたててもらった」あなた [ダック] は、「ついこの前まで貧しく社会の底辺にいたことを忘れることなく」「私の書いた詩行を読んでほしい」と声を上げる。しかも、コリアは自らの社会的存在性(アイデンティティ)を「かつて今もひとりの奴隷だ」と規定する。「自分の人生はこれまでずっと労苦のなかで費やされてきた」「そしてその奴隷状態は私ひとりではない」「哀れで貧しい女」という集団が被ってきたものだ、というラディカルな社会意識を語る。そして神話的な楽園状態(男女のジェンダーとセクシュアリティが愛の調和を伴っていた状態)を引き合いに出して、「女性という性が享受してきた幸福なる状態-楽園が時代と習慣によって破壊されてしまった」と嘆く。鉄の時代(人間社会の時代)に黄金時代への回帰を歌う牧歌の「陰画」として、反牧歌として、自らを取り巻く18世紀イングランドの農村社会の現実-奴隷状態を嘆くのだ。この厳しい声の喉もとにあるのは、不当に虐げられた女性性という、ダックによって惹き起こされてしまった社会的・歴史的意識である。コリアの声にうかがわれる「超越的で共同的な」率直さと社会的な倫理性は、この詩を読むわれわれの心を深く打つ。

③ダック=男たちへの批判の集団的な「声」

第5連以降では、農婦の人生の実情を率直に語る声が響く。「女たちは間違っている」とダックが言ったことは事実でない、と懸命に声を絞りながら。そのときのキー・フレイズ「あなた(男)たちと同様に “as well as you”」や「あなたたちと同じく “like you”」が繰り返して使われていることが、彼女の声の真摯さと社会的視野の広さを物語る。農地では「働いているときに楽しくおしゃべりする」なんてことはない、「あなたが率直に心を語る自

由があるのと同様に」「私たち女性も心楽しくしゃべる自由」を、ほんの一時にせよ持っていいはずだ、その自由を奪うとは何事か、強く弾劾する。彼女が繰り返す別のキー・ワードは「自発的に、強制されずに」(“freely”)である。社会的には男性のさらに下に置かれた奴隷状態にいるのだから、農場での協働作業は自分の判断で自由にさせてもらいたい、という男性(あるいは夫)との協働性の主張である。また、農地を農夫たちより早く抜け家路につくのは、家事(“domestic Toils”)という別の労苦が待っているから、と農婦たちの弁明もする。われわれは女たちの家事の中心が男(そして子供)の世話をする、と言うジェンダー的義務にあることを見逃してはならない。

④洗濯女の「肉声」

第8連からの後半では、この詩を書いて出版してもらったときのコリアの職業(通いで賃労働する洗濯女)と生活ぶりが克明に語られていく。領主の館(カントリー・ハウス)に暗いうちから呼ばれて行き、領主家族たちの高価な洗濯物(当時の世界商品であったモスリンやキャラコ、レースや絹の服)を洗わせられる、低賃金と引き替えに。ようやく日も高く昇った頃、「奥方(“our Mistress”)」が女たちへの景気づけにエール(リング酒か)片手に現れる。そしてコリアたちに細々と洗濯の指示を与える。とりわけ「石けんとお湯を沸かす薪を節約するように」厳しく言い渡す。ジェントリー階級は儉約のしわ寄せを労働者階級に押しつけるのだ。

最後に語られる女の労苦はビール造りである。突然女主人が使いをよこし「ビールがなくなりそうだから助けておくれ」と命じられる。たいていは真夜中に、麦汁をわかす銅の容器をこするほど洗い、水を汲んで入れ、火の強さに気を配り、寝ずの番でビール造りをする。

コリアにとっての「水」は、ダックの汗やビールと同様に、あくまで生活=労働の空間での(領主たちのための)洗濯の「水」であり(男たちが)消費するビールである。癒しの、恵みの、自らのための「水」はどこにもない。男たち(“Master”)への「奉仕」に使われる「水」なのだ。そして、ついには、長々とカントリー・ハウスでのさまざまな仕事をこれ以上語っても「虚しい」とコリアは言い、「女の労働」は「底の抜けた大きな桶に水を一杯に入れようとしているようなものだ」とギリシャ神話のエピソード(無益な労苦と女による男殺し)を使う。「水」から根本的に疎外されているのだ。

⑤勤勉と成果の篡奪構造を見破るコリア

詩の最後でコリアは、賃金労働者としての女の生活を、当時あるいは農耕詩で賛美された「勤勉なミツバチ」の比喻を使ってまとめる。自らを「勤勉なミツバチ」に、「金銭に強欲な」女主人を女王蜂に擬し、勤勉な労働の果実(利益)が篡奪される(ミツバチ)社会の構

造を自らの体験・生活をもとに鋭く暴露している。なんと率直で直截的かつ的を射たジェントリー批判であろう。「ご主人」たちに篡奪されるという点ではダックも同じだ、とコリアには分かっているのだ。

(3)「水」表象が伝えること、そしてポウプの農夫と川

①性と経済の構造

「水」とそのバージョンは、人間の「生(“sex / life”)」にも、「性(“sexuality / love”)」にも、「政(“gender / political order”)」にも「三重」に深く関わる。構造的にまとめておく。ダックもコリアも、彼らの詩のテーマである「労働」をせねば生きていけぬ賃金労働者である。その労働の時間と空間で「生」を継続するための「水」(ビールやエール)が十分に豊かに手に入れられることはない。ダックの場合は必要量に足りず(渴きを癒すことができず)、コリアの場合は苛酷な労働を強いる女主人の片手のマグ一杯分だけであった。そのとき何人の洗濯女がいたのか分からないが、またコリアがそのエールを飲んだのかどうかも定かでないが、いずれにせよ生命の「水」が二人に十分行き渡ることではない。偶々行き渡るとき、「水」は「欺き/勤勉」の宴会のビールとなり、労働にさらに励むよう仕向ける。「景気づけ/勤勉」のエールも同じ機能だ。ビールを醸造するコリアの社会性は、蜂蜜を女王蜂にせつせと運ぶミツバチのそれと同じである。ビールも穀物も、労働の成果は労働者たちを支配するもの手に納められ、彼らの自由に使われる。女王蜂(ジェントリー)が中心である秩序の維持拡大(農業資本主義の形成とそれを基盤とした産業・金融資本主義の萌芽態勢)のために。「生」のレベルに「政」が支配的に介在する構造である。さらに言えば、ダックもコリアも労働の辛苦のなかで大量の汗と輝の血という「液体」(水→流れの変種)を流す。生が磨り減らされていく表象である。

男と女の「性」のレベルではどうだろう。それは、ダックもコリアもともに語る、粗末な農民小屋の夕餉の塩漬豚と水団の入ったスープであろう。これは労働者階級の男と女の「共同性」の表象(豚肉とすいとん、異なる2種のひとつ鍋のなかでの混在)であり、味付けはベーコンの塩を中心とした旨味の少ないものであっただろう。豊かな「調和」が味わわれることは少なかったはずである。それが証拠に、もし愛の「調和」があれば、ダックは妻や女たちの労苦に共感や理解を寄せ、一方コリアはあれほどむきになって女たちの苦しい労働・家事作業を訴えることもなかったのではないか。この男女のすれ違い、調和が取れない原因は、男女の性的葛藤から生じたのではない。二人とも労働者階級の存在として篡奪される人生しか、金銭の欠乏した労苦に満ちた人生しか、送ることができないからである。つまり、文字通り生きるのに必死で、お互いへの共感的・共生的想像力を働

かせることができないのだ。ここでも「性」のレベルに「政」が支配的に介在している。では、「政」のレベルの「水」はどこにあるのか。ひとつは収穫祭の宴のビールであり、もうひとつの形象はカントリー・ハウスの貴婦人が洗濯室に現れたとき片手のマグに入れていたエールであろう。彼女は、ひよっとしたら、自分の眠気覚ましに飲んでしまったかも知れない。もしそうなら、その「水」も「欺き」のエールであり、宴のビールと同じ機能を果たしている。持てるものたちが持たざるものたちの懐柔(社会秩序の維持・延命)の道具として、自由に随意に利用できるものとして。このような表象構造(文化的社会構造)があるからこそ、ダックの農耕空間には湧き出る生命の泉が「不在」なのであり、コリアの労働空間ではビールを造れても味わうことはできず、洗濯の水(お湯)も石けんも労苦を減らすべく自由に使われることはない。彼女の洗濯桶に入れられる水はあくまで主人一家の用(高価な衣服の洗濯)にしか使われず、彼女は「永遠に」水を入れ続けることしかできない。自分のためにではけっしてなく。

②ポウプの緑と水

最後に、ジェントリー側の「緑(農耕地)」と「水」表象の社会的意味をよく示す詩行を、同時代の農耕詩と牧歌から管見しておきたい。どちらもポウプ(Alexander Pope)の言説であり表象である。先ず、よく知られたオーガスタン流の農耕詩「孤独に寄せる」ホレイシアン・オード。カソリックゆえに父母とともにロンドンを追われ、はじめて広大なウィンザーの森なかの村に住んだ少年ポウプにとって、緑の世界はロンドンの喧噪と対照的にきわめて魅力的であったに違いない。しかし、このようなアルカディアが存在するわけもないし、裕福であっても法的に土地所有をゆるされぬカソリックのポウプにとって、このような言説空間が手に入るわけでもない。そもそもこの農地では、いったい誰が農作業をするのか。ダックたちを雇うとでも言うのだろうか。つまり、この農耕空間は、ウィリアムズがクラップ(George Crabb)を介して糾弾した文化的な「絵空事、書き割り」であり、「豊かな恵みを与える緑なすうるわしき世界」と言う「神話的」表象としてのジェントリーたちの田舎の地所を、ただ空想的に賛美する「虚偽」の想像力の産物でしかない。田園の美や緑に癒される「孤独で慎ましい」暮らしは、これまで見てきたように、経済的利潤を積み上げて、その利潤を貿易・商業に投資してさらに利潤を蓄積するという、近代経済国家イングランドのジェントリーたちの専有物なのである。

だが、ここでのポウプの声は、18世紀イングランドの社会的な実態や文化的真実の一端を伝えはする。長い18世紀の激動と安定のなかでトーリーもホイッグもともに(ジェントルマンとして)夢見たひとつの理想郷であ

る。理想化された孤独な隠遁・思索生活も、あくまで文学・文化のなかでの言説でしかない。実体を持たぬ、歴史を浮遊するインターテキストとしての記号でしかない。だから、このコトバの農地に豊かに流れる(湧き出でる)水はななくとも構わないのである。

もうひとつ、この詩において注目すべきは、2行目の「父祖伝来の("paternal")」の土地と言う表現である。想像すべきは、遺産相続によって田舎の広大な地所を引き継ぎ、一家の財産(農耕地)を拡大所有していく18世紀のジェントリーたちの姿である。そしてこの「父祖の」という言葉は「家父長的な」という意味作用を持った、ジェンダー・センシティブな言葉でもあるということだ。コリアのダックにたいする挑戦の声を耳にしたわれわれにとって、捨ててはおけぬ一語である。もうひとりのポウプは、これも若書きの牧歌『ウィンザーの森』末尾に登場する語り手である。「うるわしの森ウィンザーよ、おまえの木々(オーク)は(帆船となって)世界に船出するのだ」と、意気揚々と言祝ぎの声を上げるポウプは、ユトレヒト条約によってますます(新旧)世界へと貿易と商業の翼を広げていく連合なつた大英帝国("Great Britain")を徹頭徹尾賛美している。この自然的庭園風景では、帝國的国民国家ブリテンの庭がウィンザーの森であり、そこを流れる豊かな水がテムズ川である。「果てを知らぬテムズには全人類のためにこそ流れさせよ」は、妄想的と言えるほど一部の少数の社会階級を基盤としたナショナリズムである。なぜなら、国家やロンドンのために、そしてロンドンの会社に投資していくジェントリーのために流れるのが、この川の経済的で歴史的な機能であることをポウプ自身がよく知っていたからだ。当時の大多数の貧しき労働者階級の人々を(あるいは対外膨張的なホイッグたちを表層的に)「欺く」意図的・意識的な言説と見なしても良いかも知れない。あのビールやエールと同じく、多数の貧困にあえぐ労働者たちに、また大洋の向こうにいる人々に、水の「恵み」が施されることは絶望的なほどにない風景である。ここでの水は、清らかに滾々と湧き出でる牧歌的トポスとしての泉とは無縁の、現実の重商主義的経済の流れという「暗黒」(大西洋)の水ではなかったのか。

(この報告の全体版は『岐阜大学地域科学部研究報告』36号に掲載予定)

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計1件)

①中川 一雄、「詩のかたち(2)」、『岐阜大学地域科学部研究報告』、査読有、30号、2012、37-46

〔学会発表〕(計0件)

〔図書〕（計0件）

〔産業財産権〕

○出願状況（計0件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計0件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

（なし）

6. 研究組織

(1) 研究代表者

中川 一雄 (NAKAGAWA, Kazuo)

岐阜大学・地域科学部・教授

研究者番号：10155674

(2) 研究分担者

なし ()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：